

*Pride and Prejudice* における呼称および言及—Quirk et al の分類に関して

*Pride and Prejudice* における呼称および言及  
— Quirk et al の分類に関して

笠本晃代

0 . 序

本稿では、Randolf Quirk et al (1985:773-75) による呼びかけ語の分類<sup>1</sup>の妥当性を吟味する。その論考の過程で、主たる用例は Jane Austen の *Pride and Prejudice*<sup>2</sup>から引用する。

1813年に刊行された本作品は、彼女の2冊目の長編小説に当たり、18世紀末から19世紀初頭のイギリスの田舎町を舞台として、女性の結婚事情と誤解と偏見から生じる恋のすれ違いを描いた恋愛小説となっている。本作品は、精緻を極めた人物描写と軽妙なストーリー展開で、Austenの著作の中でも傑作と名高い。作中の登場人物の女性たちは、一見頼りないが、実は鋭い観察眼で男性を見抜く能力に長けており、この点が小説として多くの読者を惹きつけ、支持される理由でもあると推し測られる。

尚、本稿では、とりわけこれらの登場人物に注目し、彼女らの間やその周辺で交わされる豊富な会話を中心として人物に対する呼称と言及の方法を分析・考察し、Quirk et al の分類の妥当

<sup>1</sup> Randolph Quirk, Sydney Greebaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (eds.) (London: Longman, 1985) 773-75.

<sup>2</sup> 本文中の引用は、Jane Austen, *Pride and Prejudice*. Complete Works of Oscar Wilde, ed. J. B. Foreman (London: Collins, 1948) に拠るものとする。以下、作品は *PP* の略号で記す。



まず、(1a) についてであるが、*mother* は、聞き手である母親に対して、話し手である息子の Gerald が直接呼びかけている。つまり、この *mother* は、統語的に文構造に組み込まれておらず、「呼称」の働きを担っていると言える。一方、(1b) については、話し手の Mrs. Arbuthnot が自分について語っており、聞き手は *mother* ではない。ここでの聞き手は今は青年となった息子で、母親である Mrs. Arbuthnot は、青年が幼かった頃のような口調で語りかけ、母親としての自分の役割を強調している。すなわち、この *mother* は、文構造に組み込まれた要素で、移動することはできないので「言及」の用法である。このように、呼びかけ語には、二つの異なる役割が確認される。本稿では、その両方について考察する。

## 2. 個人名を基にした呼びかけ語の種類

周知の通り、呼びかけ語として最も一般的なものは、個人名である。Quirk et al (1985: 773-75) では、その呼びかけ語が以下のように分類されている。

- ① first name (FN)
- ② last name (LN)
- ③ full name (FNLN)
- ④ FN with a title (TFN)
- ⑤ LN with a title (TLN)

## ⑥ (FN に基づいた) nickname or pet name (FNv)

Quirk et al (1985: 773-75)

6つの分類のうち、特殊なものは②、③及び④である。筆者が分析した結果、②と③についても非常に興味深い例が多数あったが、紙幅の都合上、これらの比較・検討は次の機会に譲り、本稿では、④に注目して論ずることにする。併せて、Quirkらの分類で示されていない個人名の使用についても論究する。

## 3. FN with a title (TFN) の使い方について

先の分類④に挙げた FN with a title (TFN) の使い方を調査した結果、作品を通して Mr. と FN を組み合わせた形や Mrs. と FN を組み合わせた形は、皆無であった。他方、作中に顕著に表われていたのが、Miss と FN の組み合わせである。*Pride and Prejudice* では、Bennet 家の 5 人の娘を始め、彼女らを取り巻く複数の未婚女性が登場する。最初の例から確認していこう。

- (2) She had already learnt that Lady Catherine was still in the country. It was spoken of again while they were at dinner, when Mr. Collins joining in, observed,
- “Yes, *Miss Elizabeth*, you will have the honour of seeing lady Catherine de Bourgh on the ensuing Sunday at church, and I need not say you will be delighted with her. She is all affability and condescension, and I doubt not but you will be honoured with some portion of her notice when service is

over....” (155)

(2) では、Bennet 家の次女で、20 歳の主人公 Elizabeth は、親類の牧師でこの一家の遺産相続人でもある Mr. Collins を訪ねてロージングズにある彼の自宅に来ている。Mr. Collins は、夕食の席で自分の後見人の Lady Catherine de Bourgh が話題になると、会話に加わり、Elizabeth にその後見人について語る。その際に Mr. Collins は、注意を喚起しようと彼女に直接呼びかけるのであるが、その際の呼称が *Miss Elizabeth* である。彼らが従兄妹同士であることは疑いないが、両者間において、Mr. Collins には Elizabeth を単なる FN で呼ぶほどの親しさが無いからであると思われる。この *Miss Elizabeth* という呼びかけ方に関しては、他にももう 1 度、Mr. Collins が呼称として使用している場面が見受けられる<sup>4</sup>。

さらに、この *Miss Elizabeth* の形に関して加えて述べると、前に My (my) dear を冠して *My (my) dear Miss Elizabeth* と Mr. Collins が呼称している場面が 3 度観察される<sup>5</sup>。

続けて、次の用例を観察してみたい。

(3) “Speak to Lizzy about it yourself. Tell her that you insist upon her marrying him.”

“Let her be called down. She shall hear my opinion.”

Mrs. Bennet rang the bell, and *Miss Elizabeth* was summoned

<sup>4</sup> *PP* 208.

<sup>5</sup> それぞれ、*PP* 95, 103, 209.

to the library.

“Come here, child,” cried her father as she appeared.

“I have sent for you on an affair of importance. I understand that Mr. Collins has made you an offer of marriage. Is it true? Elizabeth replied that it was.

(109)

上述の例は、(2)よりも前の場面であるが、ここでは、Mr. Collins は教区を離れ、暫く Bennet 家があるロングボーンに滞在している。この時点で既に、Mr. Collins は Elizabeth に求婚済みで、Elizabeth がこれを断ったことで母親の Mrs. Bennet が慌てている。Mrs. Bennet は、夫の Mr. Bennet に娘が結婚に応じるよう説得してほしいと頼み、Mr. Bennet は Elizabeth を部屋に呼ぶことになる。その際、Mrs. Bennet は、召使用のベルを鳴らし、Elizabeth を Mr. Bennet の書斎に呼ぶよう申しつけるのであるが、ナレーションの部分で、*Miss Elizabeth* という表現が使用されている。これは、母親が自らの発話の中で用いたものではないことは明らかであるが、ナレーターがより母親に近い視点を取り、召使の手前、「Elizabeth お嬢さま」程の意味で娘のことを言及していると解釈される。

今度は、Elizabeth 以外の人物にも目を向けてみよう。

(4) “I will go to Meryton,” said she, “as soon as I am dressed, and tell the good, good news to my sister Phillips...Oh! here comes Hill. My dear Hill, have you heard the good news? *Miss Lydia* is going to be married; and you shall all

have a bowl of punch, to make merry at her wedding.”

Mrs. Hill began instantly to express her joy. (290)

(4) では、16歳になったばかりの Bennet 家の末娘 Lydia が娘たちの中で真っ先に結婚する旨の手紙を読んだ Mrs. Bennet が歓喜を爆発させ、有頂天のあまり多弁になっている場面である。Mrs. Bennet は、長女や次女に向かって興奮しながら話していたかと思えば、女中頭の Hill が顔を出すと、今度は Hill に嬉しそうに喜びを語る。その折に、Mrs. Bennet は、Hill の視線から、Lydia に *Miss Lydia* と言及する。これは、「Lydia お嬢さま」くらいの意であると推測できる。

ここまで、*Miss Elizabeth* を呼称・言及の両側面から、そして *Miss Lydia* を言及の側面から検討してきた。これらはいずれも Quirk らが示す④に該当する。しかしながら、作品を詳細に分析すると、同じ Elizabeth や Lydia に関して、④の使用から派生したものやそれに付随した形のものがある。すなわち、より正確に言うと、Quirk らの①から⑥以外の形が存在することに気づかされることになる。次の4. では、それらの形の可能性を明らかにしていく。

#### 4. ①から⑥に分類されていない個人名の使用について

ここでも、次女 Elizabeth と五女 Lydia に対する呼びかけ語を例に取り上げる。まずは、(5) の Elizabeth の用例から検討する。

(5) Mr. Darcy with grave propriety requested to be allowed the honour of her hand; but in vain. Elizabeth was determined; nor did Sir William at all shake her purpose by his attempt at persuasion.

“You excel so much in the dance, *Miss Eliza*, that it is cruel to deny me the happiness of seeing you; and though this gentleman dislikes the amusement in general, he can have no objection, I am sure, to oblige us for one half hour.”

“Mr. Darcy is all politeness,” said Elizabeth, smiling.

“He is indeed — but considering the inducement, *my dear Miss Eliza*, we cannot wonder at his complaisance; for who would object to such a partner?”

Elizabeth looked archly, and turned away.

(27)

上記は、Bennet 家から少し歩いた距離にあり、彼らが特に親しくしている Lucas 一家の屋敷での一場面である。主である Sir William Lucas は、自身が催した大きなパーティーで、娘ほどの年齢と推察される Elizabeth に話しかけている。Sir William は、商売でそこそこの財産を築き、町長にも選ばれたおかげで国王に拝謁がかなって Sir の称号を得た人物である。近寄って来た Elizabeth に対して騎士道精神を発揮するつもりで声高に会話を始めるのであるが、Sir William が踊っていない Elizabeth を見かねて踊るよう勧め、Mr. Darcy を彼女に紹介すると、断固として彼女はこれを受け入れない。いよいよ Sir William は言葉を

尽くして説得にかかるが、結局空振りに終わってしまう。その時、Sir William が口にした彼女に対する呼称は、*Miss Eliza* である。

しかしながら、Eliza は Elizabeth の愛称であるため、*Miss Eliza* は厳密に言うと、title の Miss と Quirk らの分類の⑥(FN に基づいた) nickname、すなわち FNv を合わせた形になり、Quirk らの分類に当てはまらない。また、(5) の後半部分では、Sir William は *Miss Eliza* の前に *my dear* を付して *my dear Miss Eliza* と呼称し、より親近感を表現した形も存在する。さらには、この呼称に関して言えば、(5) の直前の場面においても1度、Sir William による *My dear Miss Eliza* の使用が確認される<sup>6</sup>他、Mr. Darcy も1度、これを使って呼称している<sup>7</sup>。

同様に、Elizabeth に対する呼びかけ語としては、次のような例も明らかになった。

(6) Charlotte's reply was spared by the entrance of Jane and Elizabeth.

"Aye, there she comes," continued Mrs. Bennet, "looking as unconcerned as may be, and caring no more for us than if we were at York, provided she can have her own way. — But I tell you what, *Miss Lizzy*, if you take it into your head to go on refusing every offer of marriage in this way, you will never get a husband at all — and I am sure I do not know

<sup>6</sup> PP 27.

<sup>7</sup> PP 91.

who is to maintain you when your father is dead. — I shall not be able to keep you — and so I warn you. — I have done with you from this very day. — I told you in the library, you know, that I should never speak to you again, and you will find me as good as my word. I have no pleasure in talking to undutiful children...” (111)

(6) は、(3) の後の場面である。Elizabeth が Mrs. Bennet の期待を裏切り、Mr. Collins の求婚を断ったことで、Mrs. Bennet は居ても立ってもいられない。ちょうど Bennet 家に遊びに来た Sir William Lucas の娘の Charlotte に Elizabeth を説得してくれるよう泣きついてみたり、Charlotte や Jane、Elizabeth を前にして長広舌を始めたりする。Mrs. Bennet は、Elizabeth に向かって、このままでは一生結婚できなくなると苦言を呈す際、その際、彼女を故意に *Miss Lizzy* と呼称して注意を喚起する。*Lizzy* もまた、Elizabeth の nickname であるが、*Miss Lizzy* は文脈から、「そこのわがままなお嬢さま」程度の意であろう。Mrs. Bennet が相手を少し突き放している印象を与えている。このように、母親が娘に向かって直接 *Miss* と nickname を併せた形で呼称するのに対して、次のように母親が言及する例も認められる。

(7) He came, and in such very good time, that the ladies were none of them dressed. In ran Mrs. Bennet to her daughter's room, in her dressing gown, and with her hair half finished, crying out,

“My dear Jane, make haste and hurry down. He is come —  
Mr. Bingley is come. — He is, indeed. Make haste, make  
haste. Here, Sarah, come to *Miss Bennet* this moment, and  
help her on with her gown. Never mind *Miss Lizzy’s* hair.”

(325)

上記は、Mr. Darcy の友人でもあり、誠実で優しい独身の Mr. Bingley が Bennet 家を訪ねる場面である。Mrs. Bennet は、Mr. Bingley が近々、Jane に求婚するものと予測しており、上機嫌であるが、約束の時間前に姿を見せた Mr. Bingley に大慌てである。自身の身なりも整えないまま、Mrs. Bennet は Jane の部屋に入って行き、彼女を急がせる。そして、女中の Sarah に、Elizabeth の髪よりも Jane の身支度を手伝うよう言う。その時、Mrs. Bennet は、Sarah の視点に立ってそれぞれ娘たちに *Miss Bennet*、*Miss Lizzy* と言及する<sup>8</sup>。殊に、Elizabeth に関しては、「Lizzy お嬢さま」程の意で Miss と nickname が併せて用いられているのである。すなわち、(6) と (7) では各々用法が異なるものの、これらは同様に、Miss と nickname が組み合わせて使用され得るという証左である。

ここまでで、Miss の後に nickname が付けられる場合があることが分かった。以下では、Quirk らの分類に基づいて、さらなる例外を検証していく。

<sup>8</sup> Jane に対する言及に関しては、形式上、妹の *Miss Lizzy* と同様に Jane も、“Miss Jane”と言及されそうであるが、Jane は長女で、結婚していない年長者という意味で Elizabeth と区別できるため。*Miss Bennet* の形が使用されたものと思われる。尚、作品を通して、Jane が Miss Jane と呼称・言及される場面は皆無であった。

(8) “Your conjecture is totally wrong, I assure you. My mind was more agreeably engaged. I have been meditating on the very great pleasure which a pair of fine eyes in the face of a pretty woman can bestow.”

Miss Bingley immediately fixed her eyes on his face, and desired he would tell her what lady had the credit of inspiring such reflections. Mr. Darcy replied with great intrepidity, “*Miss Elizabeth Bennet.*”

“*Miss Elizabeth Bennet!*” repeated

Miss Bingley. “I am all astonishment.

How long has she been such a favourite?

— and pray when am I to wish you joy?”

(27-28)

上例は、(5) の後の場面を記している。Mr. Darcy は、Elizabeth に一緒に踊ることを拒絶されたが、別に傷つきもせず、暫くの間、彼女のことを考えて楽しい気分になっている。その思いは、Mr. Bingley の妹である Miss Bingley に否定されても変わらないが、Miss Bingley は、Mr. Darcy の顔をまじまじと見つめながら、意中の女性が誰なのかと尋ねる。その問いに対して Mr. Darcy は、悪びれる様子もなく、それが Elizabeth であると返答する。その時の Elizabeth への言及は、*Miss Elizabeth Bennet* となっており、それを受けて Miss Bingley もまた、驚きを隠せず、*Miss Elizabeth Bennet* とおうむ返しに言う。つまり、彼らは、Miss の後に Quirk らの③に分類されている完全な full name (FNLN) を

加えて言及しているのである。これにより、Mr. Darcy 自身が、好意を抱いている女性を Miss Bingley の前ではっきりと宣言している。尚、この *Miss Elizabeth Bennet* という言及は、後にも Mr. Bingley によって 2 度<sup>9</sup>、そして Lady Catherine de Bourgh によって 1 度使用されている場面がある<sup>10</sup>。

同様に、Miss と Quirk らの分類③の FNLN を組み合わせた形は、Lydia の場合にも見られる。

(9) “...And one of my own daughters. I suppose you have heard of it; indeed, you must have seen it in the papers. It was in the Times and the Courier, I know; though it was not put in as it ought to be. It was only said, ‘Lately, George Wickham, Esq. to *Miss Lydia Bennet*,’ without there being a syllable said of her father, or the place where she lived, or any thing. It was my brother Gardiner’s drawing up too, and I wonder how he came to make such an awkward business of it. Did you see it?”

Bingley replied that he did, and made his congratulations.

(317-18)

(9) は、Mr. Bingley がほぼ一年ぶりに Bennet 家を訪問している場面である。Mrs. Bennet は、一年間に近辺であったことを彼に報告する中で、Lydia の結婚についても触れる。その際に、

<sup>9</sup> PP 36, 38.

<sup>10</sup> PP 334.

Mrs. Bennet は、弟の Mr. Cardiner が書いたという朝刊や夕刊で掲載された表現を引用する。その中にある *Miss Lydia Bennet* という言及は、そのまま「Lydia Bennet 嬢」を意味するものと解される。

従って、Miss と FNLN を組み合わせた(8)と(9)の二つの例は、比較的正式な形を取った表現であると言えそうである。

最後に、もう一度 Elizabeth の場合に戻り、以下の例を検討してみよう。

(10) Miss Bingley made no answer, and soon afterwards got up and walked about the room. Her figure was elegant, and she walked well; — but Darcy, at whom it was all aimed, was still inflexibly studious. In the desperation of her feelings she resolved on one effort more; and, turning to Elizabeth, said, “*Miss Eliza Bennet*, let me persuade you to follow my example, and take a turn about the room. — I assure you it is very refreshing after sitting so long in one attitude.”

Elizabeth was surprised, but agreed to it immediately. Miss Bingley succeeded no less in the real object of her civility...

(54-55)

これは、Elizabeth がネザーフィールドにある Mr. Bingley の家に来ている場面である。Miss Bingley は、共にその場にいる Mr. Darcy の気を引こうと、室内で滑稽なまでに様々な行動を取るが、それに全く気づかない Mr. Darcy に業を煮やし、次の一手に打って出る。均整の取れた身体つきの Miss Bingley は、

Elizabeth に話しかけ、自分のようにさまになる姿で、気分転換を兼ねて部屋の中を散歩してはどうかと突拍子もない提案をする。Mrs. Bingley は、(10) のような FN ではなく、nickname の Eliza を選択する形で Miss 及び LN と組み合わせて呼称していることから、馴れ馴れしさが感じられる。ただし、それだけではなく、完全に nickname のみでの呼称となっていない点や元来、Miss Bingley には Bennet 家との交際をあまり快く思っていないふしがある点、自分を見習うよう Elizabeth に促している点などを考慮に入れば、この Miss と nickname、そして LN を組み合わせた表現からどこか気取った、よそよそしい印象が窺えることは否定できない。

同じ人物による言及も検討しておこう。

(11) ...but suspecting them to be playing high she declined it, and making her sister the excuse, said she would amuse herself for the short time she could stay below with a book. Mr. Hurst looked at her with astonishment.

“Do you prefer reading to cards? said he; “that is rather singular.”

“*Miss Eliza Bennet,*” said Miss Bingley, “despises cards. She is a great reader and has no pleasure in any thing else.”

“I deserve neither such praise nor such censure,” cried Elizabeth; “I am not a great reader, and I have pleasure in many things. (37)”

(11) では、Mr. Bingley の屋敷の居間で、Mr. Bingley を始め、妹夫婦の Mr. Hurst と Mrs. Hurst、Miss Bingley、そして Mr. Darcy らが トランプ をしており、Elizabeth も誘われるが、本を読むと言って断る。呆気にとられた Mr. Hurst に対して Miss Bingley は、Elizabeth に *Miss Eliza Bennet* と言及しながら、彼女が読書家で遊びを軽蔑していると話す。ここでも Miss Bingley は、Elizabeth に対して FN ではなく 馴れ馴れしく nickname を用いる。しかし、これが完全な親しみではなく、どこかよそよそしく感じられるのは、先に述べた通り、もともと Miss Bingley が Elizabeth にあまり良い印象を持っていないことその他、Miss Bingley の物言いが皮肉や嫌味を含んでいること、そして Miss や LN も付していることに起因すると考えられる。

## 5. むすび

以上、*Pride and Prejudice* の登場人物間における会話の中から、Quirk らの示す個人名に基づいた呼びかけ語の分類に言及しつつ、その妥当性を検討してきた。その際、中でも特殊とされる first name with a title (TFN) の使用例を抽出し、呼称と言及の二つの観点から考察することを試みた。結果として、Mr. や Mrs. と FN を併せた形は、作品を通して 1 例も認められなかった。これに対し、Miss と FN を組み合わせた形は、呼称・言及の両面で数例確認された。Miss と FN を併せた形については、相手を FN のみで呼称・言及する程の親しい間柄ではない時に使用され得ることが明らかになった。

ところで注目すべきは、作中では、Quirk らの呼びかけ語の

*Pride and Prejudice* における呼称および言及—Quirk et al の分類に関して

分類に照らし合わせた時、必ずしもそれと合致しないもの、すなわちそれ以外のパターンも見出された。それらは、FN よりも親近感のある *nickname* を代用して、Miss と *nickname* を併せたものや、Miss と FNLN を併せたもの、そして Miss と *nickname* と LN を併せたものである。Miss と *nickname* の組み合わせおよび Miss と *nickname* と LN の組み合わせに関しては、呼称と言及の両方が認められる。Miss と FNLN の組み合わせに関しては、言及の用法のみ確認された。

要するに、本稿で考察したいくつかの例だけから判断しても、Quirk らの分類のように単純化できない形式があり、この点についてはさらなる検証が必要であろう。

## 参考文献

- Austen, Jane. 2003. *Pride and Prejudice*. London: Penguin Books.
- Crystal, David. 2003. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fasold, Ralph W. 1990. *The Sociolinguistics of Language*. Oxford: Basil Blackwell.
- 真鍋和瑞. 2009. 『ことばの散歩道』 東京：開文社.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (eds.) 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Thomas, Jenny. 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.

- Trudgill, Peter. 1974. *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. Harmondsworth: Penguin.
- Zwicky, Arnold M. 1974. "Hey Whatsyourname!" *Chicago English Society* 10, 787-801.

Address Terms and Reference Terms in *Pride and Prejudice*:

## Several Modifications to Quirk et al

Kasamoto Teruyo

Abstract: In this paper I shall try to suggest some modifications to Randolph Quirk et al's classification of terms of address and reference. In the course of discussion, I would like to quote examples mainly from Jane Austen's *Pride and Prejudice*.

According to Quirk et al, terms of address and reference are classified as follows:

- ① first name (FN), ② last name (LN),
- ③ full name (FNLN), ④ FN with a title (TFN), ⑤ LN with a title (TLN),
- ⑥ (based on FN) nickname or pet name (FNv)

(Quirk et al, 1985: 773-75)

However, there are following examples:

- (a) Miss Eliza (nickname of Elizabeth)/  
Miss Lizzy (nickname of Elizabeth)
- (b) Miss Elizabeth Bennet/Miss Lydia  
Bennet
- (c) Miss Eliza Bennet

## 笠本晃代

For reasons of space assigned to my abstract, I have only given several examples of terms of address and reference which are not covered under Quirk et al's classification. As for the details, I shall discuss them in full in another paper.

Key words: Jane Austin's *Pride and Prejudice*, title, address terms, reference terms

Received March 31. 2019